

『賃労働と資本』を学ぶ

第2回 四国ブロック

労働と労働力

レポートに入る前に

学習に入る前に、テキストは岩波文庫版を使用することとします。なお本テキストは章立てにはなっていないが、次のとおり章を設定して各章ごとにレポートを行い、レポート後に全体討論を行っていくことにします。

※仲間の皆さんに多く使用されている本を使っています。古い本、最新の本とはページ数の違いがありますがご容赦ください。

- ・ はしがき
- ・ 「賃労働と資本」のタイトルがある P 37 ～ P 40 7 行目まで
- ・ 1 章 「賃賃とは何か？ それはいかにして決定されるか？」 (P 40 8 行目 ～ P 47 1 行目)
- ・ 2 章 「商品の価格は何によって決定されるか？」 (P 47 2 行目 ～ P 56 6 行目)
- ・ 3 章 「資本とは何か？」 (P 56 7 行目 ～ P 64 6 行目)
- ・ 4 章 「資本の増大と賃金」 (P 64 7 行目 ～ P 73 9 行目)
- ・ 5 章 「生産的資本の増大と労働者階

級」 (P 73 10 行目 ～ P 86 3 行目)

いよいよレポート開始

司会 II それでは徳島県協の K さんにトッパッターをお願いします。
K II よろしくお願いします。「はしがき」については、前回の四国ブロック Y 代表の提起の中で多分に触れられていますので、重複を避けるために控えます。そのなかでも私が理解できなかったことを、1 章に入る前に教えてください。



ウィーンの3月革命（1848年）

ヨーロッパ全体に反革命

KIIパリの六月闘争、ウィーンの没落、ベルリンの悲喜劇・・・のところがよくわからないので、教えてください。
YII「パリの六月闘争」というのは、

労働者の社会改革の要求に押された共和国政府は、失業対策的な国立作業所を開設したが、1848年6月、それを強行解散する挑発行動に出た。パリの労働者は再び蜂起した。労働者階級は資本家階級と歴史上はじめて真正面から衝突したが、4日間の戦闘のうちに制圧された。この事件はヨーロッパの反革命の狼煙^{おぼろ}となった、とあります。つまり、それまで2月、3月と、ブルジョア革命で民主主義革命を労働者階級、資本家階級が共に闘ってきたなかで、失業者が多く生まれてきていました。労働者の要求によりその対策として国立作業所が開設されましたが、共和国政府はコストがかかるので廃止すると打ち出しました。それに対して6月に労働者が立ち上がり、たたかいましたが、敗北したのです。ここからヨーロッパ全体に反革命、つまり労働者を弾圧する攻撃が広まっていったということです。

次に「ウィーンの没落、ベルリンの悲喜劇」ですが、六月闘争の壊滅はドイツの反動勢力を元気づけました。一方革命の急進化に動揺し、労働者階級の成長を恐れていたドイツのブルジョア階級は、反動勢力との妥協を図り、革命を裏切り始めたのです。オーストリア皇帝は、10月ハンガリーへの鎮圧軍出動に反対する暴動がウィーンで起こると、6万の軍隊で市民防衛軍が守備するウィーンを包囲しました。11月初めウィーンは反革命の手に落ちたのです。この報に接するや、プロイセン国王は直ちに内閣を罷免し、王族の軍団総司令に組閣を命じました。プロイセン議会は新内閣不信任と納税拒否を決意し、ベルリンの市民防衛軍も武力抵抗を決議して対抗しましたが、市民軍は武装解除され、議会も解散させられたのです。こうしてベルリンも反革命の手に落ちたということです。

K IIポロランド、イタリア、ハンガリーの捨て鉢的奮闘、アイルランドの兵糧攻めなども書かれています、ヨーロッパのほぼ全体が同じような情勢であつたという理解でいいですね。

Y II要するにブルジョア革命によつて自由民主主義を勝ち取つて、これまでの封建的領主、王政を倒しても、その残党が残っています。彼らは再び自分たちに有利な王政を復活させて、昔の封建体制に戻したいと思つていました。そういう動きもブルジョアは許さないと、労働者とともにたたかつてきたが、どうもブルジョワはこの労働者階級というものは自分たちの敵になると感じて、復活させようとしている旧支配者に妥協して組み、労働者を倒そうと、つまり民主主義を潰そうとして弾圧してきた。これが反革命です。

司会 IIブルジョア革命は、封建社会から資本主義社会へ移った時の革命のことです。その狭間で、当時の封建社会

で圧制されていたのは、後々資本家になる連中もそうですし、労働者・市民階級もそう。このままでは我慢できないとして資本家も労働者も一緒になつて王政を倒すためにたたかつたのです。そのたたいのなかで労働者階級の成長を見た彼らは、倒すべきはずの王政と組んで、労働者階級を倒し、自身が社会の主となる資本主義社会へすすんでいったのです。

司会 IIほかにどなたからでも聞きたいことはありますか。

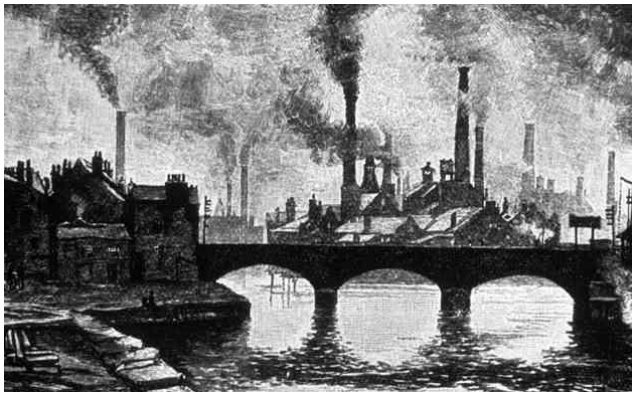
二重奴隷状態とは何だ

H II P 39の「二重奴隷状態」の意味ですが、産業革命が最初に起こったイギリスが帝国のような形で、だんだんと資本主義が広がるヨーロッパ全体を支配しているという状態のなかで、各国とも資本主義が労働者を支配している上に、さらに大元であるイギリスに

各国自体も支配されているという意味でいいのでしょうか。あと、「イギリス的」ロシヤ的」というところもよくわからない。

Y II資本主義を代表する経済大国イギリス。農奴制が多く残っている封建的絶対主義を代表する軍事大国ロシアという東西の二大支柱に挟まれたオーストリア、プロイセン、フランスの5強国からなる18世紀以来のヨーロッパの反動体制。マルクスはこの言葉で独自の政治勢力に成長した労働者階級を前に、封建的・反動と妥協するに至った資本家階級と、封建的・反動との連合による新たな支配体制を特徴づけている。これが「イギリス的」ロシヤ的」という意味である。

司会 IIつまり、封建主義の王政と、資本家階級との2つによつて隷属されたということですね。「イギリス的」ロシヤ的」という表現で、「二重奴隷状態」、2つの支配者の連合によつて労働者階級が



産業革命期のイギリスの工場群

働者階級が支配されているということ
です。

君の労賃はどれだけか？

KIIありがとうございます。それで

は1章に入ります。

「君の労賃はどれだけか？」という
問いに、ある労働者は「私のブルジョ
アから一労働日につき一マルク受け取
る」と答え、他の者は「私は二マルク
受け取る」と答えるだろうと書かれて
います。

労賃は、資本家が一定の労働時間
または一定の労働給付に対して労働者
に支払う貨幣額だという点で、労働部
門が異なる労働者であったとしても一
致するでしょう。

「労働力」と労働の違い

KII「労働力」とは、人間が働くため
の力であり、労働は「労働力」を消費
することそのものをさします。労働者
は実際には「労働力」を提供している
にも関わらず、外観では、資本家は貨
幣をもって労働者の労働を買い、労働
者は貨幣とひきかえに自分の労働を資

本家に売るといふ風に意識づけさせら
れています。

労働力も商品であり、

貨幣により価格で表される

KII資本家が、労働力を買ったのと同
じ貨幣額2マルクをもって、2ポンド
の砂糖を買うことと、12時間の労働
力を買うことは、同じ一商品を買うこ
とであり、資本家が支払う2マルクの
貨幣で、労働者は自分の生活物資を買
います。ということはこの貨幣2マル
クは、労働力が他の諸商品（生活物
資）と交換される比率、つまり労働力
の交換価値を表現します。

そして、貨幣で表現された一商品の
交換価値は、その商品の価格と呼ばれ
るため、労賃とは、労働力（人間のな
かにしかない独自の商品）の価格の別
名であるということです。



なかなか難しい

労賃は生産物の分け前なのか

KⅡ織布工の例にあるように、労働者の労賃は、労働の生産物（亜麻布又は20マルク）の分け前なのでしょうか。

そもそも、労働者は生産よりも前に雇用契約をし、その後に生産活動を行います。資本家は労賃を売上から支払うのではなく、原料の糸や労働用具の機と同様に、手持ちの財産から労働力商品を買っています。つまり、未来の労働に対して支払っているのです。なぜなら、そもそも売り上げは労働者には関係ないことであり、生産物が売れても売れなくても労賃は支払われます。

また、織布工に提供される機と糸はあらかじめ用意されており、織布工自身の生産物ではありません。同じく、労働によって受け取る諸商品（貨幣またはそれで購入する生活物資）も織布工の生産物ではありません。つまり、労賃は、資本家が現在持っている商品（財産または既存の生産物）の一部分であって、織布工は、生産物または生産物の価格の分け前からは何も得ていないのです。

労働と生活は別なもの

KⅡ労働者は生きるために自身の労働力を商品として資本家に売りますが、時間で区切られたその労働は、労働者にとっては自身の生活のなかの一犠牲と言える時間です。生産物をつくる労働をすることが労働者の目的ではなく、資本家のために働いているわけでもありません。

労働者が自身のために生産するのは生産物ではなく、『労賃』であって、その労賃が自身の生活資料に変わるのです。つまり、労働者の生活は、家で休んだり、食事をしたり、寝たりなど、労働の12時間（当時の労働時間）以外の時間のことであり、自身の衣・食・住のために労働をしているに過ぎないのです。



労働者が自身のために生産するのは『労賃』

労働力は昔から商品だったのか

K君 それでは、労働力はいつからどのようにして商品になったのでしょうか。

人間社会は古代奴隷制社会、封建制社会を経て資本主義社会へと発展してきました。

まず、奴隷制社会での奴隷は、所有

者から所有者へ移され、こき使われるだけの身分にあります。彼は商品としての労働力は持つておらず、彼自身が一商品として扱われたのです。

次に封建制社会での農奴です。彼は土地に縛られて自身の農具を用いて生産します。しかし彼は労働力を売っておらず、また地主から賃金を受け取るわけでもなく、むしろ地主に収益をもたらします。実際は自身の生産物の大半を地主に収奪され、残った分の生産物のみで生きていかなくはなりませんでした。

そして資本主義社会における「自由」な労働者です。彼は所有者にも土地にも縛られてはいませんが、自身自身を断片的に、日々の数時間を売りまします。労働者はいつでもやめることができます。資本家も都合により労働者を解雇します。しかし、生きていくために労働するしかない労働者は、資本家に労働力を売るしかありません。

「自由」には二重の意味があります。まず一つは、奴隷や農奴のように直接支配下に置かれておらず、自身で働く先（資本家）を選ぶことができます、働くのも働かないのも自由（自分の労働力を自由に処分できる）という意味での自由。もう一つは、自分の労働力しか商品として売るものをもっておらず、生産手段から切り離されているという意味での自由。この二つです。

結局のところ、「労働力」はそう呼ばれていなくても、本来人間に備わっているもので当然に過去からあるものですが、資本主義社会になって初めて資本家と労働者という二大階級が生まれ、賃労働が生まれたことによつて「労働力」は商品となったのです。

司会 Kさん、ありがとうございます。1章について、レポーターや参加者の皆さんが分からなかったところや、議論を深めたいところは、次回とします。